【地域活動ノート】

東武鉄道越生線沿線プロモーション作品の制作

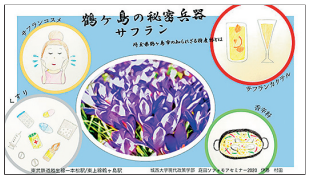
庭田文近*・現代政策学部庭田ソフォモアセミナー2020年度履修生**

活動の概要

城西大学現代政策学部の２年次セミナー科目である庭田ソフォモアセミナーは、グループワークによる大学周辺地域の観光・地域プロモーション活動を通じて、情報の収集・読解能力の向上と、調査・分析・資料作成・プレゼンテーション手法の修得を授業目的としている。2020年度は、越生線改善対策協議会[1]と連携し、東武鉄道越生線およびその沿線地域のプロモーション活動として、前期に沿線自治体のポスター、後期に越生線を扱った動画作品を制作した。新型コロナウイルス感染症拡大のため対面授業も学外授業も厳しい制約を受けるなか、オンライン授業を活用したり、感染対策を行いながらの少人数に分かれた実地活動により、作品を完成させることができた。

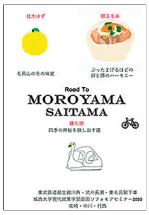
キーワード：越生線、コロナ禍、地元観光、地域プロモーション、地元愛

【地域PRポスター制作】



2020年度前期授業は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、本学では対面授業が禁止された。当セミナーでも、Zoomを使ったオンライン授業で地域PRポスターを制作することが余儀なくされた。

そこで学生達は、越生線改善対策協議会の各自治体から提供された資料を輪読し、ポスターの制作にあたって２つのテーマを設定した。１つ目は、「越生線沿線ないしは近隣住民に対して越生線に乗って地元を観光してもらう」である。コロナ禍によって県を跨いでの観光が躊躇されるなか、地域内での対流を促すことが目的である。２つ目は、「越生線沿線地域の住民に対して、地元愛（いわゆるシビック・プライド）を醸成させる」である。沿線住民に対して自分たちの地域の魅力を発信することで、「このまちに住み続けたい」・「このまちだから住みたい」と思ってもらうことが目的である。



---

*　城西大学現代政策学部准教授

**　村中皓（学生代表執筆者）・明石桃・伊藤孝将・稲妻快・大野匠望・勝澤順基・勝野拓磨・佐藤南海・柴﨑良輔・千崎航汰・中川貴博・中澤薫乃・村田翔・村西祐哉。

1　埼玉県の坂戸市・鶴ヶ島市・毛呂山町・越生町・鳩山町・ときがわ町から構成され、事務局は越生町企画財政課に置かれる。

ポスターの制作は、Zoomのブレイクアウトルーム機能を使って、２～３人のグループに分かれて行った。フィールドワークができず、資料とインターネット情報のみで観光資源や地域の魅力を探るのは、風土の実感がわきづらく、やや迷走するグループもあったが、グループの枠を超えて議論・協力しあうことで、制作が進んでいった。現地へ行けないため、過去に自分たちで撮影した写真がない場合は、イラストを描いて地域の雰囲気が出るようにした。また、手書きの文字を配置することで温かみを強調してコロナ禍の閉塞的な心理状態に響くように工夫をするグループや、あえて細かな文字で長文のメッセージをレイアウトすることで読破意欲をそそる工夫をするグループも見られた。

【越生線プロモーション動画制作】

対面授業が解禁された後期は、東武鉄道越生線のプロモーション動画の制作を行った。

まず、前期に制作したポスターの発表・批評を踏まえて、新たに４人のグループに再編し直した。また、動画のテーマも、前期を踏襲し、越生線沿線の地元観光の推進と地元愛の醸成とした。次いで、全国各地で作られているシティ・プロモーション動画の鑑賞・批評や、越生線沿線の地域資源とその活用に関する全体ディスカッションを行った後、各グループに分かれて作品タイトルの設定とシナリオの作成を行った。シナリオは、ややもすると物語に拘り過ぎてしまい、地域プロモーションという目的から逸脱しそうになったため、何度か経過発表と検討会を実施した。教室内では、飛沫感染対策のために間隔を離れて座らなければならず、議論や作業のやりづらさはあった。

撮影に際しては、コロナ禍での感染対策として、マスクを着用した少人数での行動、密集・密接・密閉状態の回避、こまめな消毒などが徹底された。また、撮影後の長時間におよぶ編集作業は、授業外にZoomやファイル共有サービスでオンライン・グループ作業を行うなど、作品の完成に向けて学生が主体的にプロジェクトを遂行していった。

【活動を終えて】

前期に制作したPRポスターは、坂戸市役所庁舎内と東武鉄道越生線の越生駅構内に展示された。また、後期に制作したプロモーション動画は、PRポスターとともに、越生線改善対策協議会を構成する市・町のホームページで紹介された。

今年度は、コロナ禍での活動だったため、積極的には地域の方々との交流を持てなかったのが残念であった（後期は、撮影地の方々に協力してもらうなど、多少の関わりは持てたが）。

この１年間の活動を通して、地域活性化や観光・交通の研究に興味を持ったり、自分の地元の魅力を再認識し、郷土に愛着を持つ学生が少なからず現れたことは喜ばしいことである。